

# 郷土室だより

第1号

昭和48年6月15日

編集・発行

東京都中央区立 京橋 図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電話 543-9025



日本橋の高札場 孟齋芳虎画

明治初期版画 原画 日比谷図書館所蔵

郷土資料室では、こうした錦絵の写真や、明治時代の写真、またそれと対応する現在の写真も集める方針で、現在までに2,000枚近い写真が集っています。

## ◆ 発刊にあたって

当館の郷土資料室は、誕生後日が浅いので十分な機能を果たしているとはいえませんが、最終的には中央区に関することならなんでもわかるというほどに郷土―中央区に関する資料を収集し、皆様の利用に供することを目的としています。

○当室の資料は、特別な貴重書等を除き開架室の一般書同様、貸出しをしています

ので、遠慮なく利用してください。

○当資料室では、閲覧サービスの傍ら、当館所蔵郷土資料目録・佃島年表・中央区年表（明治篇・大正篇・昭和篇）などを刊行してきました。発行部数が少ないという非売品なので、ご存じない方も多いと思いますが、今後大いにご利用ください。なお誤りの箇所など、お気づきになりましたら御教示にあずかりたいものです。誤脱を正し、増補して、再版を出したいという希望

をもっています。

○さて、このたび、郷土資料室と利用者各位との連契を密にするため、「郷土室だより」を発行することにしました。年四回の予定です。写真や、さゝやかな館員の報告や、資料の紹介などに使う予定であります。

皆様のご指導ご鞭撻をお願いします。

## 薬研堀周辺

## 居住の検校

## 安藤 菊 二

江戸時代の末に刊行された切絵図の薬研堀・矢の倉周辺を眺めると、武家屋敷に介在して、検校の名を刻するものが二・三ならずあるのに気がつく。それがどういふ人物だったかと、知りたくなるのは、独り私だけではあるまい。

嘉永三年版図の金山検校(若松町)、山沢検校(久松町)、安政六年版図の矢島検校・鏡島検校(村松町)、成川検校(久松町)といった人達がそれぞれある。

僧官の業は、音曲師匠か鍼術・按摩か、高利貸しに相場がきまっていたから、そのいずれかの業にたずさわっていたのに相違あるまいが、い多少し詳しくその人となり判ったら、地図を読む楽しみもまた一段と増すことである。

切絵図にその名は見えぬが、杉山流鍼術を伝えた武蔵野検校勝虎も、村松町に住み、上野輪王寺宮の侍医として名声を博していたことが、『日本橋区

史』に書いてある。

## 鏡 島 検 校

私は、右の安政図に見える村松町の鏡島検校は、あるいは平曲を伝えた、あの鏡島検校ではなかったかと思っている。

鏡島検校は、江戸でも数少ない平家琵琶の宗匠の一人であった。琵琶法師の流派は、京都に前田・秦野の二流があり、江戸に伝播したのは前田流であった。しかし、これを伝える者はきわめて少なく、百余家あるといわれた江戸検校の中で、平家物語を語るものは十人ほどにすぎなかった。

平家琵琶は、今日では命脈まさに絶えんとしているが、「江戸時代にはまだ少なからぬ用途があつて、上野・芝の徳川氏靈廟忌辰の際には、平曲の献奏がつきものであつたし、大名の第宅落成、官位昇進の祝宴、あるいは大店開業の祝いなど、慶事・凶礼・公私を問わず、一曲演奏の機会があつた。もつとも、古来からの慣習で、酒宴のなかば、または船中、あるいは琴三味線を奏した後の席などには、けつして平曲を語りぬ定めであつた。」という。

(『日本経済事典』)

江戸の平曲宗匠は、筒井伊賀守の手下に著名な福住検校がいたといわれ、

幕末には鏡島検校と伊豆島検校の両検校が知られていた。伊豆島検校の時代に明治維新となり、宗匠家の名目は断絶した。

## 山 田 斗 養 一 検 校

箏曲に山田流の一流を立てた、山田斗養一検校も、薬研堀に住んでいた。三村清三郎翁によれば、三升屋喜三治の『貴賤上下考』に、「山田一流を弘めしは山田検校と養一といふ。江の島の下節に妙音をきかせ、其外のうたひもの、琴の名曲に高く名をあげしは、人の知る所なり。薬研堀石橋の角に住て一流を残す。今に流儀多し。」と誌してあるそうである。(『日本芸林叢書』

第八巻 眞註)

斗養一は、宝暦七年四月二八日、三田了任の子として生れ、名は勝善といつた。幼少の時失明し、生田流の箏曲を『箏曲大意抄』の著者山田松黒に学んで、出藍の誉あり、その後母の実家山田氏をつぎ、贅官を累進して検校の位を得、その名、世に聞えるにいたつた。検校は師風になじまず、上方の箏曲を改めて、江戸風に合ったかんたんで力強い一流を編みだし、文化六年に作曲二五曲を載せた『吾孀箏宇多』を刊行、山田流なる一流を開いた。この稽古本は文政七年に三五曲に増補して

改刻されていて、広く世に迎えられることを示している。高野辰之博士は、彼は生田流において用いる角爪に代えるに丸爪をもってし、生田流は箏に対して斜に坐するを改めて、当面に正坐することにした。これが箏の音色曲風に影響して、時人をして傾聴せしめる一因となつた。

と云っておられる。(『日本歌謡史』)

門下は数千人といわれ、能島松声・山登松和・山勢松韻・山本千賀といった人達がこの検校の門から輩出してゐる。

『新修葛飾区史』によれば、検校は文化一四年四月一〇日六一才で没したが、死の数年前まで父親が存命し、検校は不自由な身体にかかわらず、父に良く仕え、飲食のこと身辺のことまでほとんど人手を借りず、手さぐりで奉仕する様子は、見る者をして涙を催おさしめたという。

浅草山谷の浄土宗源照寺にあつた墓は、昭和三年三月、寺院とともに葛飾区新宿町三丁目に移り、昭和四年四月東京府の史蹟指定を受けた。碑面には「覚涼院殿式普響和斗養居士、前総録山田検校之墓、文化十四年丁丑四月十日卒」の文字を刻し、裏面に彼の伝記が詳細に刻まれているという。

検校の木像もまたこの寺にある。

## 芦 沓 舎 麻 績 一 檢 校

葉研堀に住んでいた檢校で、著名な人に、なお芦沓舎麻績一檢校がいる。嘉永三年尾張屋清七版の切絵図の、葉研堀の安井算知の宅地の近隣に「アシノヤ」と刻するのは、この檢校を示したものとされる。

麻績一檢校の伝記は、大川茂雄・南茂樹氏共編の『国学者伝記集成』（明治三十七年、大日本図書株式会社刊）に「誓人伝」という書を引いて記述があり、だいたいの輪廓は分っているが、詳しいことは分らないことが多い。第一、生年月日が分らない。しかし安政二年の大地震で亡くなった時、五三才だったということから逆算すれば、享和三年（一八〇三）生れということくらいは推定できる。江戸に生れたのである。

第二に失明したのは幾つの時だったか、これも分明を欠いている。生れながらの盲人ではなかったらしい。

朝田弓弦の門に学ぶようになったのは、あるいは失明後だったかも知れない。生来、国文学に興味を懐いていたので、国典にして読まざるなく、わけでも『源氏物語』に精通し、人のために口誦して、かつて一度も誤まることになかったといわれる。歌文ともに善

くし、文政六年、二十一才の時に同門の山本明清の爲に『尚古仮名格』に跋文を寄せた。その文章は流暢で、人々の推重するところとなった。この文章の末に「座頭麻績一しるす」と書いていて、この頃すでに目盲いていたことがわかる。

文政八年には丸林孝之の『多武峯少将物語』の校註本に序を寄せた。序文の末には「高取の殿人、安斯廼告のあるじ、座頭麻績一」と書かれている。高取というのは、大和高市郡高取藩をいうのであろう。祿高二万五千石。当時植村出羽守家長が藩主であった。江戸での上屋敷は芝切通、中屋敷はあたご下、下屋敷は三田古河町にあった。この頃は、僅かながら扶持を頂いて、芝の藩邸へ仕候することもあったらしい。天保七年（一八三六）麻績一三四才の時に『広益諸家人名録』の天保版が版になった。この書に、号東洋堂、会日午前半日「本所横綱、阿斯能夜勾当」と載っている。この頃は勾当に進み、本所横綱に住んでいたのである。天保七年といえ、この年成稿した『山崎美成著述稿』に、次のような記事がある。

むかしの友なる阿斯能夜檢校は、中ごろ久しく交り遠ざかりしか、こたび令義解よみてよとありしに、十月

五日にはじめて行けるに、折からけふは哥のまどゐの日にて、当座は探題分ちつつ、おのれもかれこれとものがたりに時をうつし、この日兼題は薄暮烟というを、あるじの檢校のよめる。

何となく心ほそきは薄けぶりよそめになびく夕ぐれの空

歌は雄勁という点には欠けるけれども新古今を旨とした整った歌風をなしていることは、この一首からも察せられよう。

麻績一が檢校に任ぜられた年も詳らかでない。唯その喜びを述べた歌として

紫の衣ゆたかにたちしかどつゝむに  
あまる今日のうれしき

という歌が伝わっている。この歌は、『古今和歌集』巻一七に載る

嬉しさを何につゝまむ唐衣たもとゆ  
たかにたてといはましを

という歌を、本歌として詠んでいるように思われる。

さて、檢校は、かように学に篤く、友人の敬愛を受けていたのに、不幸にも安政二年十月二日、江戸を襲った激震の災禍を蒙って、いたましい死をとげてしまった。

斎藤月岑の『武江年表』にも、笠亭仙果の『なるの日並』にも、その死を

悼む記事載せている。それらの記事の中で、月岑の『武江地動之記』に載せるところが、もっとも詳しくその最後の様を伝えている。

葦の屋檢校、葉研堀続の武士地に住す。博覧宏才にして、皇国の学よし。歌をもよみ、又針術の高手にして、当道家の内人もゆるしたる人也。

。「割註、しなどの風、其余著書も多し。」二日夜、富沢町なる柳屋長右衛門「割註、能の装束を貸して活業とす。」療治にとて、驕をもたらして迎へしかば、止事なくて行ける

が、長右衛門が息子の妻何がしが療治にかゝりて居ける時、震出しければ、檢校かの婦をいざなひて逃出でんとしけるにや、家潰れてともに即死す。惜い哉。「割註、あしのやは

近き頃官医となれり。普通の誓者の如く、高利の金を貸して、足をはかるの如き類にはあらず。」

享年は五三才であった。

「港区の文化財第八集、新橋・愛宕山付近」によれば、麻績一檢校の墓は港区芝西久保巴町九八、栄閑院（通称猿寺）の墓域にあり、正面に「阿斯能夜家代々之墓」、右側面に「広道院殿檢校阿斯能夜麻績一正誓慈明大居士、隨順院殿清浄光大姉、天保十亥年六月十二日」と刻してあるという。

資料案内

東京に関する本は、昨今の歴史ブームでずいぶんおびただしい数にのぼっている。しかし、いざ、中央区や東京の昔のことを調べようとする時、どの本にどの様なことが書いてあるか不明な点も多いと思われるので、逐次、郷土資料室にある資料の紹介をすることとする。

1 東京府誌料

東京都都政史料館所蔵の原本を譲印したもので、昭和三四年から同三六年にかけて、五分冊として刊行された。B6版 総頁一五〇七頁。

「本書は、明治五年四月陸軍省が各府県の地図ならびに地誌の編纂を企図し、国内各地の沿革現勢を録上させ、それによって当時の日本の国勢を明かにしようという要求に応じ、東京府一円にわたって調査編纂……した地誌である。

陸軍省では、この編さんに当って、某街某村は縦横幾町、戸口若干、男幾人女幾人、華士族平民庶人各幾人、牛幾頭、馬幾匹、馬車人車各幾輛、天造の各品、人作の諸物、一歳の産出凡そ幾許、ということを、遺漏なく記録することを要求した。

こうした方針に則って編成された記録であるから、本書が、明治初年の東京の実態を把握する上に、必要にして欠くべからざる好資料をなしていること、もとより論を待たない。

試みに、銀座の箇所を開いて見ると二丁目の物産として、

蠟燭製造高千五百貫、箔一万四千枚  
桐油合羽二千枚、張抜茶筒六千二百二十個、腹掛百五十枚、股引四百四十具、足袋四千四百八十雙。三丁目の物産として、西洋服五百具、価金二千五百円。蠟燭五百二十五貫目。四丁目の物産として、人力車六百輛、金一万二千元などと記されている。

工業といっても、職人の手仕事全盛の時代に、文明開化の時代が到来して銀座三丁目には早くも洋服の仕立屋が開業し、一着五円もする洋服の仕立にはげんでいるし、四丁目に開店した秋葉大助の人力車工房では、新発明の人力車の製造に大わらわになっていた状況を想察することができる。

ただ、本書の構成は、大区小区時代の行政区画に従っているもので、その境界が現行政区画に比べ、錯雑していて検索しにくい。

なお、中央区の区域内のことは、卷一第一大区の五小区から十六小区にわたって詳細な統計として載せてある。

尾島文庫の寄贈図書

昨年暮の「区のお知らせ」(二四六号)でお知らせしましたように、日本橋の尾島栄一郎氏から多額の教育資金のご寄贈をえて、当館に「尾島文庫」の設置をみました。

文庫の内容は、歴史・地理・芸術をはじめ、日本文化に関する図書が主ですが、この中には、

- 大日本史料 既刊分 一二〇冊
- 古事類苑 五一冊
- 芸苑叢書 (和装) 五九冊
- 南紀徳川史 一九冊
- などの大揃いのほかに、郷土資料としては、一部八万円もする毎日新聞社版の『江戸図屏風』や、本区関係の錦絵三〇余点などが含まれています。
- ご承知のように、江戸は、旧幕時代には、三百諸侯の邸地を抱えた一大消費地でしたから、全国的な規模で物資が集散しておりました。地方都市と本区との物資の交流を考える上で、役立つ本も意識的に集めてみました。
- 近江商人中井家の研究 一冊
- 小野組の研究 四冊
- 阿波藍沿革史 一冊
- 絵具染料商工史 一冊
- などがそれです。書齋の本を使うように御利用なさってください。

催し物のお知らせ

東京を語る会 第9回

日時 6月23日(土)午後二時~四時  
場所 当館 鑑賞室  
演題 「江戸ッ子」  
講師 東京都公文書館主任調査員

川崎房五郎先生  
講師、川崎先生が、三田村鳶魚翁と  
きあとの「江戸通」の第一人者である  
ことは皆様ご存じのとおり。

主なる著書として「築地居留地」「江戸時代の八丈島」「銀座煉瓦街の建設」「明治初年の武家地処理問題」などのほか「江戸八百八町」「江戸風物詩」「明治東京史話」の三部作もあります。今回は、「江戸ッ子」についてお話をうかがうことになりました。出席をお待ちしております。入場は無料です。

○会のあゆみ

- 1 江戸城の防備について 豊島寛彰氏
- 2 江戸時代人の骨相 河越逸行氏
- 3 明治大正期の築地周辺 乾 達雄氏
- 4 大正時代の日本橋地区 田中閑水氏
- 5 両国界隈の歴史 野尻泰彦氏
- 6 佃島の話 佐原六郎氏
- 7 広重の浮世絵について 鈴木重三氏
- 8 江戸の市政と町的生活 荒井貢次郎氏